

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団	
施 設 名	大分県立総合文化センター (iichiko総合文化センター)	
助成対象活動名	人材養成事業	
内定額 (総額)	3,094	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	3,094	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ジュニアオーケストラ育成事業	2018年4月～2019年3月	iichikoグランシアタ・ジュニアオーケストラ、大分県立芸術文化短期大学学生・教員、九州交響楽団団員、下野竜也	目標値	100
		大分県立総合文化センター		実績値	73
2	ホールボランティアスタッフ育成事業	2018年4月～2019年3月	角屋里子、公立文化施設職員、県民	目標値	100
		大分県立総合文化センター		実績値	56
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	200
				実績値	129

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

下記の通り、当該事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進めることができた。両事業とも齟齬等、生じることはなかった。

■必要な構成要素とその因果関係

<ジュニアオケ育成事業>

県や各分野の団体とも連携協働し、芸術文化のリテラシーを備えた創造性豊かな人材を地域に輩出することを目標に掲げ、H30年度で結成10年を迎えた。アカデミークラスを開設し、経済的状况等に関わらず、等しく芸術文化に参加・創造できる環境を整備し、社会的価値の実現に向けた取組みを拡充してきた。H30年度はアルゲリッチ音楽祭、国民文化祭に出演するなど大分の音楽界を一層盛り上げることができた。

■事業計画の遂行

<ボランティアスタッフ育成事業>

県内の中核文化施設として、当劇場のボランティアスタッフのレセプション研修のノウハウを各公立文化施設に伝える為、当初予定していた事業を実施することはできた。結果、54本の公演とワークショップ等で活動した。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

下記の通り、当該事業が助成に値する文化的、社会的意義等が認められると考える。

■文化的意義

定演では、友人出演等を介し、幼い頃から芸術に触れる環境が整いつつある。団員は事業を通して「教養が高まった」と感じ、ボランティアスタッフも講座を通して知的好奇心を刺激され、参加の意義を感じている。大きな成果と考える。

■社会的意義

世代や地域の異なる参加者同士が互いに切磋琢磨し、1つの「成功」に向けて取り組むことは、各々の自己の存在を肯定し、生きる力に繋がっている。ジュニアオケでは、プロオケへ入団、アートマネージャーとして活躍する卒団生がいる。

■地域のニーズ

一流の講師に指導していただく環境は助成の賜物である。ボランティアスタッフ育成事業については、貸館利用者にも一流のサービス技術を身につけたスタッフを派遣し、来場者はそのサービスを受けることができ、スタッフは経験を積み重ねる良い機会となった。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

当該事業は、下記の通り、目標を設定し、達成することができた。

■目標1：次世代を担う子どもたちの音楽活動と大人向けにはホールに必要なホールレセプションистの育成をとおして、本来の目的（楽器演奏・接客対応）はもちろんのこと、芸術文化を通じたコミュニケーション能力の向上や各人のマナーアップを行う。

＜ジュニアオケ育成事業＞

学年や地域が異なる子どもたちが「オーケストラ」という学校以外のコミュニティで演奏会という目標に向かって共に研鑽したり、楽器を皆と一緒に運搬する過程で、豊かな感性や協調性、他者を思いやる心を育む場となった。

＜ボランティアスタッフ育成事業＞

研修会以外に、2回の定例会で公演対応時の課題を共有すると共に、ホール職員等が主催事業に関連する内容を年6回レクチャーするなどし、スタッフ同士の交流が深まり、チームとしての団結力が深まった。

■目標2：直接の対象者のみならず、大分県全体に受益者を拡大する。

＜ジュニアオケ育成事業＞

「アルゲリッチ音楽祭」：来場者269名、「国民文化祭」：来場者1241名、「第10回定期演奏会」：来場者981名という結果で、来場者数については目標に届かなかったが、大きな演奏会を3つ経験することで、団員の達成感や自己肯定感が高まった。

＜ボランティアスタッフ育成事業＞

主催事業のほか、共催公演や一般の貸し館公演、県主催のイベントへも派遣するなど、年間で合計54回で、例年を大きく上回る活動だった。

■目標3：活動を通じて若い世代に芸術の魅力をPRし、地域社会の活性化に繋げ、芸術分野のみならず、様々な地域の課題に対応していく。

＜ジュニアオケ育成事業＞

アルゲリッチ音楽祭では、県内在住の子供達にジュニアオケの演奏をホールで聴いていただき、その後、楽器体験をしていただいた。また、ジュニアオケの団員は、定期演奏会前に、近隣の商店街を訪問し、自分たちの活動をPRし、普及に努めた。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業期間、事業費が共に適切で、当初の計画通りに進めることができた。

■事業期間、収支予算、決算について

<ジュニアオケ育成事業>

平成30年度は楽団結成10周年により、5月の別府アルゲリッチ音楽祭「子どもによる子どものためのコンサート」、11月の国民文化祭「オーケストラと合唱の祭典」、3月の「第10回定期演奏会」という大きな演奏会を3つ経験した。そのため、例年よりも練習回数が多く、多忙な1年であった。しかしながら、いずれの演奏会も演奏のレベルは非常に高く評価され、充実した事業となった。

事業費について、今年度は例年より活動規模が大きかったにもかかわらず、当初予算に対し、支出を大幅に抑えることができた。これは、国民文化祭の特別予算を活用したこと、ホールが所有する楽器のメンテナンスについて、不要不急のものは実施せず、必要最小限にとどめたことや、演奏会の広告宣伝については、保護者会の口コミや地元ローカル番組の告知コーナーなどに団員が出演するなどし、支出を抑えることに努めた結果である。

<ボランティアスタッフ育成事業>

国民文化祭を見据え、年度当初に追加募集を実施し、48名ものボランティアが参画した。年間の主催公演数は例年より少なかったものの、共催公演や一般の貸し館公演への派遣対応が多かった。さらに国民文化祭期間中には、約2週間の間に大規模な公演が4本も集中するなど、スタッフ調整に苦労した。

当初の計画では、市町村の公立ホールへの派遣体制も整えていたが、直前にキャンセルとなった。今後も引き続き、育成したスタッフを県内全域に派遣できるよう、市町村との連携を強めていきたい。

追加募集にあたり、広告宣伝費を800千円計上していたが、口コミにより早い段階で多くの応募があった為、広告を掲出する必要がなくなり、支出を抑えることができた。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

下記の通り、地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であったと認められる。

■ 劇場・音楽堂等を象徴する人物、鍵となる人物

<ジュニアオケ育成事業>

川瀬麻由美氏を芸術監督としている。川瀬氏は、桐朋学園大学卒業後、梓室内管弦楽団のコンサートマスターを務めるなどされてきた経歴の持ち主で、現在は大分県立芸術文化短期大学教授である。同氏に講師、定期演奏会演奏曲の選定、演奏指導内容の決定等を依頼している。また、定期演奏会の指揮者である下野竜也氏は、2006年読売日本交響楽団の初代正指揮者就任後、京都市交響楽団常任客演指揮者等を歴任し、現在は、同常任首席客演指揮者等をされている。今年度は、両人のネットワークを最大限に活用し、充実した指導体制を実現させた。

<ボランティアスタッフ育成事業>

ホールレセプションニストを指導する角屋里子氏は、オーチャードホールオープン当初より運営に関わり、レセプションニストマネージャーとして活躍。大分県立総合文化センターの開館準備期より、ホールボランティアスタッフの運営、指導に携わっている。

■ 人材養成

<ジュニアオケ育成事業>

アルカス佐世保との合同演奏、合宿等の取り組みは、他県他施設との交流という今後の計画、展望によるもので、新たなものであった。通常の練習に加え、九州交響楽団等のプロ奏者からの特別レッスンがある。今年度は楽器を始めたい子供たちを対象にした初心者クラスに力をいれ、クラシック音楽人口を多岐にわたるアプローチで増やすことも意識し、運営してきた。

<ボランティアスタッフ育成事業>

芸術文化のそれぞれのジャンルの特徴が把握できる「emo茶会」という職員等によるレクチャー講義を始めた。このレクチャーは、様々なジャンルの芸術文化を学ぶと共に、各々のスタッフがお菓子を持参する。人気のあるこの企画は、学びながら他のスタッフや職員とコミュニケーションが取れるのが魅力だ。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

下記の通り、地域の文化芸術の発展につながっていたと認められる。

■当劇場

大分県立美術館と隣り合わせにあり、2つの県立文化施設を核に、大分県の芸術文化発信拠点として県内の芸術文化振興を牽引している。オペラ等の大型公演も実施し、県外へ行かずとも質の高い公演鑑賞ができる機会を提供している。また、大分市の中心市街地に立地し、JR大分駅からはアーケードで繋がっており徒歩約15分。駅からの巡回バスもある。大分ICから約10分で駐車場も美術館と併せ550台、駐輪場もあり、利便性の高さには定評がある。情報発信は、HPに加えSNSを利用している。

■設置者からの評価

H29年度分であるが（H30年度分は今秋）、全体的に評価は高い。特に広報活動において、近隣商店街でのポスター掲示やJR大分駅での広告等、館内にとどまらない告知が評価されている。

■ステークホルダーの期待（要求）及び情報発信

<ジュニアオケ育成事業>

今年度は、地域最大の文化事業である別府アルゲリッチ音楽祭、国民文化祭に出演した。別府アルゲリッチ音楽祭「子どもによる子どものためのコンサート」（5/14）において、団員は水戸室内管弦楽団のR.バボラーク氏らのレッスンを受講し、本番に臨んだ。終演後は、団員が子ども向けのヴァイオリンとチェロの楽器体験を指導し、オーケストラを身近に感じていただいた。また、国民文化祭（11/4）においては、全国公募のオケ奏者、県内の中高生で結成された特別合唱団と「大地讃頌」で共演。合唱との共演は初めてで双方の出演者、また鑑賞者にとって非常に感動的な演奏となった。情報発信においては、保護者からの要望に応え、SNSで定演の練習をUPし、保護者がそれをシェアするなどし、告知拡大に繋がった。

<ボランティアスタッフ育成事業>

ボランティアスタッフ研修は、県公文協議会加盟館にも呼び掛けた。劇場職員の基礎を身に付ける場として、県の中核劇場としての使命を果たした。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

下記の通り、事業を通じて組織活動が持続的に発展したと認められる。

■劇場・音楽等堂間のネットワークの形成

＜ジュニアオケ育成事業＞

第33回国民文化祭おおい「オーケストラと合唱の祭典」（11月4日開催）において、ジュニアオケは、アルカスSASEBOジュニアオーケストラ（長崎県佐世保市）と合同演奏を実施した。この日の為に、夏に大分県立総合文化センターにおいて、共同合宿を開催するなど、劇場間同士の関係性がより深くなった。また、それぞれのジュニアオーケストラ長所、短所を知ることができ、運営していく上での問題点等も情報交換、共有することができた。子供たちにいたっては、音楽を通じた他県の子供達との交流により、人生観、世界感が広がるきっかけとなり、コミュニケーション能力、多文化社会で生きていく為に必要な「人と人とのつながり」「他者を認める心」の大切さを認識することができた。アルカス佐世保との取組は、ジュニアオーケストラが将来的に、多くの他県の劇場との交流を検討しており、持続的に発展したと言える。

■ボランティアの育成、スキル向上の取り組み

＜ボランティアスタッフ育成事業＞

ホールボランティアスタッフ育成事業は、開館20年以來続いているものであり、当館の主催事業には、ボランティアスタッフの存在は欠かせないものとなっている。

2018年度は、例年よりも全体の活動回数が多く、全てのスタッフが活動できた為、全体の技術向上につながった。また、今年度は、「国民文化祭の閉幕行事」や「NHKのど自慢」等、多ジャンルの文化行事に従事したこともあり、活動の幅が広がった。さらに当館のボランティアスタッフが講師となり、レセプションニストに関するレクチャーをして欲しい旨、依頼があった。日程調整が難航し、実施できなかったものの、講師として必要なアウトプットする為の準備により、教えるノウハウに関する知識も蓄積された。